

「神」となった三人の兄たちへ

——二つのアジア主義と日朝中同盟——

樋口 篤三

◇サイパン島戦の教訓

六〇年前の一九四五(昭和二〇)年元旦、「雑煮でささやかに正月を祝った後、分隊長の大野祐通大尉は、講堂に私たちを集め、『各自、遺品として髪を切って手箱に収めておくように』と指示し、軍人としていかに死ぬべきか、パイロットとしての心構えを説いた。それまでの訓示と明らかに違い、分隊長の表情は固く、私は『いよいよ来るべき時が来たか』と覚悟を決めた。』(同班の増田三郎の手記『等身大の予科練——戦時下の青春と、戦後』常陽新聞社02年10月)

私が一六歳で海軍予科練生として土浦航空隊に入隊したのは、一九四四年六月一日。日米決戦となったサイパン島戦は同月一日に始まった。大本営と東條英機首相(陸相、参謀総長、軍需相兼任)は、「難攻不落」の「堅固なる正面に猪突し来れるは、敵の過失なり」と喜んだが、圧倒的な戦力差で二日間で勝負は決まった。が、日本軍の玉砕作戦のために戦闘は続き、七月八日にほぼ日本軍が全滅して戦いは終わった。

「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓は

軍隊を貫き、さらに島在住の市民(沖繩人が多かった)にまで徹底されていた。松浦総三・鈴木均・早乙女勝元編著『萬歳岬の虹——玉砕島からの証言』(77年 時事通信社)には、民間人の自決の悲惨な状況が具体的に書かれ、「この世の地獄だ」と表現されている。

米軍総兵力一六万七千人、戦死三四四一人。日本軍は陸海計四万三五八二人、戦死四万一二四四人。約二千人、五パーセントが捕虜になった。在留邦人は約二万人で、うち八千一人が戦没。組織的戦闘の終了後六週間までの收容者は、日本人一万四二四人、朝鮮人一三〇〇人、チャモロ族二三五〇人、カナカ族八七五人であった。(米海兵隊公刊戦史)

昭和戦争文学全集の五『海ゆかば』は鶴見俊輔解説だが、最後の中山義秀「テニアンの日」と菅野静子(同島の会社勤務から看護婦)「サイパン島の最後」は、実に生々しい記録で、天皇・皇后夫妻がぜひ読んでほしいものである。

◇戦陣訓——守った将兵は餓死・戦死

戦陣訓は、日中戦争で日本軍の戦場道徳が

崩壊し中国民衆の抗日気運をますます高めたことへの「歯止め」として、板垣陸相時に作られ、四一年一月に東條陸相名で発表された。それから四年、この戦陣訓軍規と兵站補給を無視した作戦のために餓死者は約一四〇万人、戦没者合計二三〇万人の約六割という、戦争史上に類例のない悲惨な結果となった。日米戦局の転換点となったガダルカナル島は、「餓島」とよばれたが、三万人中で戦死者が五千人に対し、一万五千人が飢餓で悶死していった。その責任の所在は分かっているのに、当てもその後も誰一人負わず、「名誉の戦死者」として靖国神社にすべてが「神」としてまつられた。この「無責任の体系」が十五年戦争の本質である。

◇私も韓国・中国人も忘れない

日本軍は、中国戦線で一千万人以上を、アジア太平洋戦争で計二千万人以上といわれるアジアの人びとを殺傷した。私が六〇年たっても兄たちの死を悼むと同じように、韓国や中国の人びとにも、その痛みと「怨」はいまも残っているということを、かなりの日本人

は「都合よく」忘れていたのではないか。とくに靖国派の政治学者や自虐史観派の学者、ジャーナリストたちには、この感性と反省がゼロである。

A級戦犯は、連合軍、とくに米国の「勝てば官軍」的な面もあるが、「日帝三六年の植民地支配」の韓国や莫大な人と物の被害を受けた中国人の心とからみれば、加害責任を当然負うべき指導者たちである。そして一四〇万人も餓死させ、サイパンや沖繩戦で市民を巻き添えにし、スパイ視した日本国民への加害者でもあり、本来日本民衆が裁くべき犯罪人なのである。

◇生きて虜囚となった東條大将たち

彼ら戦陣訓を作った將軍たちは、自らはその適用外であった。米占領軍に「生きて虜囚」となったがために裁判にかけられ、A級戦犯として処刑された。自ら作った軍律を自らが破ったことに對して、当時もその後もどこから不問なのは、まったく不思議である。

東條大将・元首相は、敗戦直後の九月、逮捕に來た米憲兵を見て気が動転し、ピストルで心臓を撃ちそんじて「生きて虜囚」となった。醜態きわまりなし、と作家高見順が日記に記したのも当然であった。

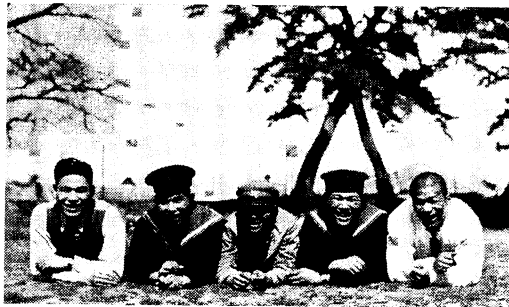
復員した一七歳の私が、戦争に最初に疑問を感じたのが、この東條事件と捕虜になったこと、ついで天皇の人間宣言——現人神（あらひとがみ）ではなかった——で、軍国主義価値

観はこの実物教育でガラガラと崩れだした。

◇「私の心はすでに神です」

私の兄の四男慶治は、素敵偵察機搭乗員で、極北のアッツ、キスカ島から南は豪州に近いブーゲンビル海戦にも参加したが、サイパン戦で隊が全滅したらしく、戦死現認者はゼロ、永久に不明で「水漬く屍」（みづくかばね）となった。彼はその前年頃から戦死を覚悟していたらしい。沼津の実家に古いアルバムがあり、母がNHK静岡で放送した（43年9月）時の記事、インタビューが各紙に載り、母あての慶治のハガキも紹介されていた。

「マスコット



【写真は、樋口兄弟。右から、純三（三男）、慶治（四男）、篤三（六男、筆者）、栄助（五男）、利一（次男）。一九四二年春】

トなどしやれたものはいりません。私の心はすでに神そのものです。飛行機に長く乗っていると（注 一日十時間、隔日）、身体が人間ばなれしてきます。決して犬死はしませんから御安心下さい。」一九歳の時である。

五男、栄助も母に「今度帰ってくる時はきれいになって帰ってきます」母「きれいになつて？」彼「桐の小箱で靖国神社ですよ」という会話も載っていた。一七歳である。

◇栄助戦死と母のなげき

私は天皇放送の一週間後に部隊解散、焼野原の東京を経て沼津に復員した。一カ月前の爆撃で市街は壊滅していたがわが家は残っていた。百坪の庭に六発の焼夷爆弾がおちたが、「子どもがお国のために命がけで戦っているのだから逃げるわけにはいかない、家を守る」と、母と兄嫁の二人が水と毛布で消し止めたのだという。

栄助戦死の報は、公報より先に、北海道美幌航空隊以来、休日にもお世話になった近藤さんからの頼りが最初であった。八月一日早朝、北千島北端の占守島にソ連軍が攻撃してきたので応戦、栄助らの艦上爆撃機は、一隻を沈め、二隻目に体当たり自爆し、二隻を撃沈して戦死した、と。一九歳であった。私と二歳違いでとくに仲良かっただけに、大衝撃を受け涙がとどなく溢れた。

母は私の目の前にいたが、何かわからぬ叫び声をひことあげ、両手で虚空をかきむしって深くなげいた。男六人で上の三人は徴兵で陸軍へ、そのうち次兄は上海戦で重傷。下三人は志願兵で海軍少年航空兵へ。航空決戦が言われ、「空だ、男のゆくところ！」のポスターが溢れたが、一家二人（さらにその後一人

というのは静岡県下にいないから、「荒鷲の母」としてNHK放送に選ばれたのであった。その母が、全心全身でなげいたその姿は、鬼気迫るものがあった。

私の母と同じように、悲しみ嘆く百万人を超す母親たち。その母の愛と悲しみ、怒り（向ける相手が不明）が、戦後を生きる私の原点となった。

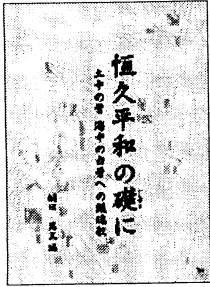
◇ヤルタ密約とソ連参戦

占守島戦と栄助戦死。敗戦三日後のこの戦争は、六〇年間「なぜ？」と疑問であった。陸軍の鹿兒島知覧特攻隊は、同じ一八日に、天皇の名代として竹田宮が訪れ、解散を命じている。

昨夏三回のガン治療で時間ができ、懸案の三兄の追悼記をまとめた。『恒久平和の礎に——土中の骨、海中の白骨への鎮魂歌』（05年3月、左の写真）である。

ソ連軍は、満州、朝鮮、南樺太とともに北千島を攻撃したが、その背景は同年二月のヤルタ協定・密約に明記されていた。

ソ連軍はドイツ戦終了後三カ月目に極東で日本軍と戦う。その見返りは①南満州の権益、



②南樺太、③千

島列島、をソ連

領にするなどで、

米ルーズベルト、

英チャーチル、

ソ連スターリン

の三首脳の署名がある。

ソ連はその実行をしたのであった。日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏をしたのだから、ソ連は外交交渉で日本軍の武装解除を要求すればいいのに、奇襲上陸攻撃を行なった。日本軍の海軍軍令部は、大西自決で中樞が崩壊しており、指揮系統はなくなっていた。一七日には天皇の「陸海軍人に対する勅語」もあり、大海令（49号）で「一切の戦闘行為を停止せしむべし」も指令された。が、方面軍指令なのか、二日間戦い、そのあとで降伏した。栄助らは、不時着かパラシュート降下など脱出生還の選択肢はあったのに、あえて「われ敵艦に突入す」と打電し、突っ込んだのだ。母に言ったことを実行したのである。だが、一方では、司令官の特権性は特攻基地でも示され、「最後の機で自分も突入する」と公言していた陸軍の富永中将（第四航空軍司令官）は、一人で逃げ去った。

◇日中二つの軍隊——特攻隊と少年兵

三男、純三は、中国の「大陸打通作戦」で戦死した。中共軍の捕捉殲滅を狙った史上空前といわれた大作戦は、壮大な空振りとなり、日本軍の衰退化を早めたのみであった。

日中戦に当たって日本軍は「三カ月短期決戦」勝利戦略であったが、八年たっても決着はつかず、四五万人もの戦死（餓死を含む）者をだして敗北に追い詰められていた。アグネス・スメドレーの『偉大なる道——朱徳の

生涯とその時代』やニム・ウェールズの『人民中国の夜明け』などを再読してみると、中国の軍隊は、日本の軍隊、その精鋭特攻隊と比べて、質量がまったく違うことが分かる。

特攻隊は敗北必至の中で、ごく少数の、悲痛さがみなぎる決死兵たちであったが、中国の平均一九歳という若き兵士たちはその数倍数十倍の数に達し、三大規律八項注意の規律、強姦が一件もない（朱徳）という世界の軍隊で稀なモラル、故郷と祖国解放感のあふれる士気、そして自発的で死を恐れぬ勇敢さが、前記記録にはみなぎっている。中国人を見下げ（半面で恐怖し）、三等民族扱いした日本軍は、昭和天皇の弟の三笠宮参謀の指摘どおり、モラルを失い、三光作戦——焼きつくし、殺しつくし、奪いつくす——という決定的誤りをおかして自壊していった。

日中二つの軍隊の決定的な差は、靖国史観の人種民族の優劣論ではなく、帝国主義戦争・侵略戦争か、民族解放戦争かの大義の根本的違いと「政治と道徳」にあるのであった。

◇靖国史観——日露戦争と大東亜戦争

靖国神社が編集発行した『日露戦争百年』（05年3月刊）の基調は、日露戦争も大東亜戦争も、いずれも白人帝国主義国に対するもので、「有色人種の人種平等と有色人種による民族国家の独立に寄与した戦争であった」とし、日露戦争後は、①米国内に台頭する排日運動②日露戦争で得た満州国の権益の中国による

侵害 ③ロシア革命とコミンテルンの暗躍によって「宿命付けられた大東亜戦争への道」というものであった。

さらに「朝鮮半島は、我が国の安全保障のかなめとして、絶対に譲れない地域であった。征韓論が生まれ、江華島事件が起こり、日清戦争が勃発したのはそのためである。」(監修者「永江太郎」とする。

大東亜戦争は、米、中国、ソ連の排日反日運動によって余儀なくされた「自存・自衛」戦争だった、とも言う。A級戦犯「昭和殉難者論の歴史観である。中国は、日本の権益を脅かしている加害国だ、朝鮮は「日本の生命線」で、一九〇五年の「韓国保護権確立」と〇五年の「日韓併合」は正しかったとも言う。

韓国や中国との間に、戦後かつてなかったような政治外交の緊張が続くのは、こういう戦前の大日本帝国と同じ主張が堂々とされているからであり、「靖国派」議員が百人を超え、首相参拜で「内政干渉をはねつけよ！」と主張することに対して、反日運動が高まるのは当然なのである。

私たちがまた明治維新以来の歴史総括が問われているのである。

◇二つのアジア主義——松陰と海舟

明治維新革命と前後して、日本には二つのアジア主義があった。一つは吉田松陰を源流とする。「国力を養いて取り易き朝鮮、支那、満州を斬り従え」、南は「台湾、呂宋(ルソン)、

フィリピンのこと)諸島を収め」る覇道アジア主義・帝国への道である。

木戸孝允の征韓論、大久保政權と黒田清隆の江華島攻撃をへて、伊藤博文、山縣有朋、桂太郎らの路線によって、朝鮮植民地化は完了した。昭和期の「満州建国」は、関東軍の板垣参謀、とくに石原莞爾参謀によったが、その重化学工業化は「私の描いた作品」だと岸信介は言った。

大東亜戦争について、「満州国」総理、張景惠は、「全アジアの満州国化」が目的だと明言した。つまり全アジアを大日本帝国の傀儡国家としようとするのだと、東条内閣に代わって本音をずばりと語ったのである。

もう一つのアジア主義は、勝海舟の欧米帝国主義に対する日朝中三国同盟による対抗戦略構想であり、海舟はこの観点から、日清戦争に反対し、韓国の大院君、金玉均、中国の丁汝昌、康有為らと親交を結び、フィリピン革命家のホセ・ラモスを高く評価した。

◇孫文と堺利彦

若き社会主義者、堺利彦は、日露戦争前に横行した朝鮮・満州の武力組込み論は「盗賊の主張」だと言い、仁義の東洋道徳による道徳的ヘゲモニーによる北東アジアの共存を唱えた。(孟子に学ぶ)

孫文は、死の四カ月前に神戸で「大アジア主義」について講演し、日本は「霸道西歐帝国主義の番犬となるか、王道の仁義道徳によ

るアジアの干城となるのか」と迫った。堺利彦と同じ政治と道徳、思想と志であった。

今、小泉内閣は「米国の番犬」をよそおいつつ「東アジア共同体」の盟主を狙っている。だが、アジアは戦前のアジアにあらず。隣国韓国・朝鮮、中国などとかくも対立してその道は八方ふさがりである。

いまは一八六八年(明治維新革命)——一九四五年(新憲法・戦後大改革)に次ぐ歴史の大転換である。労働者が再び目覚め、市民ヘゲモニーを発揮するチャンス到来である。そのためにも、アジア太平洋戦争、さらには維新革命以来の歴史総括を協同で行ない、生産点とともに地域主権で、市民がもつと広く深く大きく起つべきときは、今である。

中国革命の英雄、朱徳は言った。「私は六〇年生きてきた。これからの一年一年はそれだけ儲けものだ。」(『偉大なる道』)

兄三人は計六〇年の生涯であった。「人生二〇年」を決意した私は「不覚や吾はまだ生きのびて」(戦争末期の歌)か、好運か、七七年生きた。まさに儲けの人生である。

生あるかぎり反戦平和と民主主義の闘いと市民革命を、仁義の東洋道徳と市民連帯(池明観)で日韓の団結を、朱徳、彭徳懐、周恩来らが生涯めざした「人類解放の偉大な道」を、私も一オルグとして歩くつもりである。

在天の兄たちよ、「神」から人間にもどって、恒久平和とアジア団結の道をとにも歩こう。(ひぐち・とくぞう、日本労働ペンクラブ会員)